

ZTAJA1-Z1A1-01

一

悲しみにつついて

3月

添削問題

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

(100点)

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

*注
トランキライザー…精神安定剤

問一 これまでにあなた自身が体験した傍線部のような思いを、Bさんの体験と比較しながら二〇〇字以内で述べなさい。

(三〇点)

問二 問一を踏まえながら、他者の「悲哀の心理」を理解することについて、あなたが考えるところを六〇〇字以内で論じなさい。

(七〇点)

(小此木啓吾『対象喪失——悲しむということ』より)

ZTAJA1-Z1C1-01

一 問題

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

(100点)

悲しみについて

3月

添削問題解答解説

※著作権処理の都合上、文章は掲載しません。

（小此木啓吾『対象喪失——悲しむということ』より）

＊注 トランキライザー…精神安定剤

問一 これまでにあなた自身が体験した傍線部のような思いを、Bさんの体験と比較しながら二〇〇字以内で述べなさい。

（三〇点）

問二 問一を踏まえながら、他者の「悲哀の心理」を理解することについて、あなたが考えるところを六〇〇字以内で論じなさい。

（七〇点）

出題意図

大学で学ぶ目的の一つは、人間を探究することである。どのようなジャンルの学問であれ、その根底には人間とその社会を見つめる視点があるものだ。大学入試で課される小論文は、君たちにその視点があるかどうかを問うための課題であると言ってよい。小論文のテーマに、人間の感情や感覚、心理が取り上げられることが多いのはそのためである。

そこで、今回の課題では、特に人間の「悲しみ」の心理にスポットを当て、そこから他者の心理を理解することの可能性を考えさせるものを課題した。人間の心のメカニズムについて関心を持つと同時に、それを社会全般の問題として考えられるよう、視野の拡大を図ってもらいたい。

出典紹介

小此木啓吾『対象喪失 悲しむということ』（中公新書 一九七九年）より、第六章の一部を抜粋。

小此木啓吾は一九三〇年東京生まれ。慶應義塾大学医学部を卒業、同大学医学部助教授、東京国際大学人間社会学部教授などを務めたが、二〇〇三年に死去。専門は精神医学、精神分析学。日本におけるフロイト研究や精神分析学の第一人者で、精神分析を日本の社会一般に紹介したことで知られる。主な著書に、「モラトリアム人間」という概念を提示した『モラトリアム人間の時代』（中央公論社、一九七八年）、現代日本人の心理構造の変化を詳しく解き明かした『現代人の心理構

造』（日本放送出版協会、一九八六年）がある。この『対象喪失 悲しむということ』は、「（愛情・依存の対象であった対象を失うことによる）悲しみをどう悲しむか」という、人間にとって永遠の課題とも言える心理プロセスを、「読者とともに辿ることを目的にして」書かれた本。筆者が医療の現場で実際に体験した具体的事例が数多く提示されており、諸君にも読みやすいと思う。

設問研究

1 設問要求の把握と課題文の理解

小論文の勉強というと、「文章を書く技術を磨くこと」と単純に思いがちだが、書く作業以前にまず必要になるのが、与えられた題材（課題文・資料など）をしっかりと読み解くことである。課題文読解型の小論文で、君たちが論じるべきことは、課題文の筆者が最も力を入れて論じている事柄や問題についての、君たちの意見であるからだ。自分では「考えたことをうまく文章にできた」と自信满满でいても、その論点が課題文の内容と無関係であったり、関係があっても枝葉の部分にこだわっていたりするのは、高い評価は得られない。そうならないためにも、まず次の二点を心がけてもらいたい。

- (1) 設問文をよく読み、何を論述すべきかという要求事項と、課題文読解の方向性を把握する。

今回の課題の設問は、「これまでにあなた自身が経験した傍線部のような思いを……述べなさい」という問一と、「他者の『悲哀の心理』を理解することについて……論じなさい」という問二の二問から

ZTAJA1-Z1C1-05

成り立っている。このことから、課題文の主題は他者の「悲哀の心理」とその理解についてなのだろうと見当がつけられる。

(2) (1)で得た情報をもとに課題文を読み、その中心となる内容（主題）をしっかりと把握する。

課題文の構成・内容をまとめておこう。第一段落で、筆者は「現代社会における」社会意識と社会的コミュニケーションから〈対象喪失―悲哀〉という心理構造が排除され」ていること、その一方で「外的な出来事としての対象喪失現象」が「社会の裏面で目に見えぬ形で大規模に発生している」ことを指摘する。そして「この現代人における意識と存在の乖離^{かいり}の進行は、不気味である」と、筆者自身の基本的な問題意識を読者に示す。その後、第二―最終段落で、筆者は「悲しむ」人間の姿をBさんとT夫人の二人を素材として詳しく描写する。

Bさんは、夫に先立たれた直後に糖尿病を患って視力が衰え、また脳卒中で手足が麻痺してしまった。病院に入院したBさんは周囲の人々を誰彼かまわずつかまえては自分の不安と悲哀を訴えて回るが、迷惑がられるばかりである。Bさんと面接すると、彼女は「どうして私ばかり……」と喪失の悲しみと周囲の無理解への嘆きを泣いて訴える（ただし、そうやって自分の悲しみを言葉にして人に語ったとき、Bさんは「おとなの心」をとりもどしていた）。T夫人は、母を亡くし、また子宮筋腫の手術で子宮を失うが、家族は彼女の悲しみにまるで共感を示そうとしない。

二者に共通するのは、愛情や依存の対象としていた伴侶や肉親、自身の身体的機能を喪失したこと、しかしその喪失の悲しみを受け止め理解する人のいない「悲哀の排除された世界」で孤独に生活している

ことである。つまり、筆者がここで主題としているのは、悲しみの存在に無関心で、悲しむ人々を理解しない現代人・現代社会のあり方についてなのだ。今回の課題に取り組むにはこの問題（危機）意識を把握・共有することが不可欠である。

2 問一への対処

課題文の主題を押さえたら、次にそれについて考察を深めていこう。オリジナリティのある論述を書くためには、自分の体験や見聞を生かした発想が欠かせない。今回の問一は、この発想のしかたを勉強してもらうために用意した準備体操の設問である（このような問いがないときにも、この作業は自主的に行わなければならない）。

さて、君たちは傍線部のような思いを実際に抱いたことがあるだろうか（ここでの「不幸な目」とは、大切なものを失った体験それ自体だけを指すのではなく、その悲しみが周囲に理解されない嘆きでもあることは、もうわかっていることと思う）。ここで次から次へ自分の体験を文章化できた人もいただろうが、多くの人は語るべきことはあるけれど、それを言葉にするのは意外に難しいという感想を持ったのではないか。体験は個人的なものだから、それを他者にわかってもらえないように説明するのはなかなか難しい。そこで、その個人的で特別な体験を他者にもわかるように一般化（抽象化・普遍化）して語る工夫が必要になる。

ここで「Bさんの体験と比較しながら」という要求が意味を持ってくる。自分の体験と他者の体験を比べてみることによって、君たちはおのずと自分自身（とその体験）を一步離れた立場から検討すること

になる。つまり自己を相対化する視点が生まれてくるのだ。自分の体験のどこが他の人と違い、どこが似ているのか。その異同はなぜ生じているのか。こういう疑問に一つ一つ丁寧に答えていくことによって、個別具体的な体験から他にも通じる一般的な要素が引き出せる。この分析の過程をきちんと示してまとめられた個人の体験談は、そこから導き出された結論にオリジナルな魅力と十分な説得力を与えてくれるだろう。

もつとも、七十歳のBさんとは違い、君たちは失ったものよりも、むしろまだ手に入っていないものの方に関心がある年頃であるかもしれない。「悲しい」体験はそれなりにあるとしても、Bさんの思いと比較するにはほど遠いなあ、という感想を持った人も多いのではない。それならばそれでよい。そんな思いは未体験だ、まったく何も思いつかないという人がいたら、そこにポイントを当てよう。「体験がない」というのも、考えようによつては立派な自分の体験である。なぜBさんであつて、自分にはないのか、と比較して考えていけばよい。あくまでも大事なのは自己を対象化して語る視点である。

3 問二への対処

問一を踏まえて、問二では「他者の『悲哀の心理』を理解すること」について、いよいよ「論じて」もらうことになる（今回のように、複数の小問が課された出題では、各設問の関連性を考えてみよう。出題者は、問一を問二へ至るステップとして設定している場合もあるからだ）。しかし、「他者の『悲哀の心理』を理解することについて」という要求は少し漠然としている。一体何を書いたらよいのだろうか。

最大のヒントを与えてくれるのはやはり課題文である。問一での作業によつて、課題文への理解はより深まったはずだ。ただし、いくら筆者の考えをよく理解できていても、その要約や感想で終わってしまったのは小論文としての意味をなさない。課題文のポイントを踏まえつつも、「私はこう考える」という方向を打ち出すことが重要になる。問一で見た自分の体験から深く納得できたところはあつたか、逆に違和感を覚えるところはなかったか、ここをもっと詳しく説明してくれるばよいのにと不満に感じた点はなかったか、ともう一度丁寧に考えてみてほしい。筆者の主張に触発されて出てきた、自分の素直な疑問を引き出し、そこを切り口にこれから自分が論じるべき対象を明らかにしよう。参考までに、その切り口になりそうな疑問（論点）をいくつか挙げておく。

・ BさんとT夫人、二つの具体例の間に違いはないか

身寄りのないBさんは、自分の対象喪失を語るうちに、「幼い子どものように人びとにまわりつく、（悲しみに）うろたえた」存在ではなくなった。T夫人には家族がいるが、家族は誰一人彼女の悲しみに関心を持たない。彼女に残された道は、悲しみにこだわるような弱い心を捨て、「気楽な気分」にノックタ毎日を送る心掛けを身につける「ことだと言う。悲しみにとことんこだわる」と、悲しみから気を紛らわせることと、それぞれの結末はどのように考えられるか。

・ BさんともT夫人とも違う事例は考えられないか

BさんもT夫人も、自分の悲しみの理由を自覚しており、そのために「孤独であり、狂っているようにさえみえた」。もし自分で自分の悲しみを自覚できなかったらどうなるか。

ZTAJA1-Z1C1-07

・他者の悲しみを理解しない人を、単純に「悪い」と言えるか

「陰気くさい話はよしてくれ」「深刻めいた話は嫌いよ」「ツカレルねえ」といったT夫人の夫や子どもの言葉にむしろ共感を覚えるということはないか。好きな人、親しい人にこそ、相手を不快にさせないように、愚痴をこぼすまいとし、楽しい雰囲気共有できるような話題を選びを心がけるということもあるのではないか。

また、悲しみを理解しない人々に、積極的な「悪意」があるわけではない。病院のソーシャルワーカーに見られるように、善意の発想から悲しみを現実から排除しようという考えを抱くこともある。T夫人の息子が母親を茶化すのも、ある意味母親の気分を軽くしてやろうという善意の表れだと考えられなくもない。

論点が定まったら、それに対する自分なりの主張・見解を提示する。その際には、筆者の主張に同意するにせよ、批判するにせよ、自分がどういう価値判断でその主張にたどり着いたのかを説明しなければならぬ。自分の意見は根拠とともに示されて、はじめて説得力を持つ。意見とその論拠が用意できたら、あとは構成を整えて終わりだ。適切な段落分けを行い、各段落間のつながり（論理展開）に注意して、〈論点の設定↓自分の主張・見解↓その根拠〉などの順序にまとめよう。

解説

【対象喪失 (object loss)】心理学、精神医学において「対象喪失」とは次のようなことを言う。①愛情・依存の対象の死や別離、②住み慣れた環境や地位、役割、故郷などからの別れ、③自分の誇りや理想、

所有物の喪失など。

【悲哀の仕事 (mourning work)】精神分析学者ボルビー (Bowlby, J) は、母親と引き離された幼児が示す反応を観察し、愛するものを失った人間のとる行動および心理は、抗議（対象喪失に対する抗議と不安）↓絶望と悲嘆↓離脱（対象に向けていた関心や欲求の忘却）という段階で変化すると考えた。人間は愛情・依存の対象を失った現実をなかなか最初は受け入れられない。そこで、失った対象を悔やみ懐かしむことを何度も繰り返し、その対象と自分との関わりを追体験することによって、心の中を整理していく。そうした作業によって、はじめて現実を安らかに受け入れることが可能になる。

【悲哀の仕事の回避は何をもたらすか】喪失した対象と自分との関わりを追体験し、現実と直面することには苦痛が伴う。その苦痛から逃避したり、何らかの理由でその「悲哀の仕事」を段階を追って進められなかった人は、ときとして精神的活動に変調をきたす。精神分析学者リンデマン (Lindemann, E) は、「人は悲しむべき時に悲しまずにいると、delayed mourning (時期を逸した悲哀) を経験することになる」と述べている。悲しみに直面している人に対して表面的に励ましたり前進を促すことは「悲哀の仕事」を妨げることになり、悲しむ人々をかえって孤独にしまうのである。

【共感と思いやり行動】共感 (empathy) とは「他者の感情あるいは置かれている状況を認知し、同様の感情を共有すること」である。心理学者アイゼンバーグ (Eisenberg, N) らは共感と思いやり行動の関係について、次のように言っている。「自他の区別の概念が未発達な乳幼児は、あまりに激しい他者の悲しみに直面すると、それと自己の

ZTAJA1-Z1C1-08

感情を分けて保っていくことが難しくなり、他者に対して思いやりを示すよりは、むしろ嫌悪し拒否するという利己的行動を示すことが少なくない。」悲しみへの共感を適切な援助に結びつけるには、アイデンティティの確立がまず必要なのである。

【「思いやり」の文化的背景】 日米の十五歳から二十四歳の青年を対象に「道に迷って困っている人を見たらどうするか」という質問をし、「声をかける」「尋ねられれば教える」「気にかけない」の選択肢から一つを選ばせると、アメリカ人青年の六割が「声をかける」を選じたのに対し、日本人青年の七割は「尋ねられれば教える」を選じたという実験結果がある。つまり、日本人の「思いやり」は、その気持ちはあっても積極的な行動に結びつきにくく、受身的になりがちなのである。このような日本人の行動は、自分の意志や価値判断に基づいて動くのではなく、他者の気持ちを汲み、他者の承認を得て動くことをよしとする日本人の自己のあり方と深い関連性を持つ。

解答例

例1

問一

健康にも家族にも恵まれている今の私には、Bさんと同じような体験はない。けれども、「どうして私ばかり」という気持ちには、覚えがある。小さいときに妹とケンカをして、一方的に自分ばかりが悪いことにされてしまったときの気持ちだ。そのときの私は、悪者にされたこと自体が悲しかったのではなく、自分の不満をうまく説明する言葉を知らなかったために、周囲の大人たちに取り合ってもらえなかったことが悲しかったのだと思う。

(二〇〇字)

問二

課題文で、Bさんははじめ子供のような振る舞いを繰り返さなければならなかったのは、自分でも自分の気持ちが高なかわからなかったからだ。しかし、周囲に疎んじられても徹底して自己の感情の表出にこだわり続けたBさんは、最後に「悲哀の仕事をもにする」人、つまり悲哀を言葉にして表すための話し相手を得て、おとなの心を取りもどすことができた。

翻って自分について考えてみると、自分の悲しさを表すのに適した言葉が見当たらないのに気づく。そもそも悲しみや怒りといった激しい感情を表す言葉が、私や私の友人の会話にはほとんどでてこない。その代わりによく口をついてでてくるのが「ビミョー」だ。白黒をつけずあいまいな判断でものごとをやり過ぎす上で、「ビミョー」という言葉はとても使い勝手がよく便利なものだ。だが本当のところは、このソフトであいまいな言葉を用いることで、私たちは他人を傷つけたりすることを避けると同時に、自分の気持ちにも「悲しい」「悔しい」といった明確な輪郭を与えることを避けているの

例1について

問一では、Bさんと同列に語れるような体験を自分は持っていないという意識から出発し、その違いを考えていくなかから、「自分の感情をうまく説明できず、他者に伝えられない悲しさ」という一つの共通項を見出した。それを受けて、問二では、悲しみを表現する言葉の機能に焦点を当ててみた。

他者と自分の相互理解は、ふつう言葉を通じて行われる。もちろん親しい人間関係においては、いちいちこと細かに言わなくても「言外の意」を察してもらえ、そういう関係にばかり依存していると、「わかっているはず／わかってきているはず」という思い込みのなかで、互いのすれ違いが大きくなっていたり、自分でも自分の気持ちをいつのまにか見失ってしまうということが起こりかねないのではないだろうか。

この解答例では、考察の対象、その根拠ともに「自分」の体験をもとに書いてみた。自分に引きつけつつも、それを一歩突き放してみる論じ方を学んでもらいたい。

ではないか。

自分の悲しみを理解する言葉を持たない者が、他者の「悲哀の仕事をとにもする」とことはできない。したがって、他者の悲しみを理解しようとするならば、まず自分の悲しみをじっくりと見つめ、自分の言葉で自分の心のなかに焼きつけることが必要であろう。

(一行二五字詰換算 六〇〇字)

例2

問一

中学時代に交通事故で大怪我を負ったことがある。後遺症で身体がなかなか思い通りに動かせないもどかしさや、進級が遅れそうな不安などで、私もBさんのように「どうして私ばかり」という気持ちに襲われた。家族や友人は、私が不安を口にするに「あまり思い詰めてはいけない」と事故の話題を避け、優しくしてくれたが、私の気持ちは完全にはわかってもらえなかったと思う。だが、自分一人で自分の気持ちを慰めることもまた難しい。

(二二〇〇字)

問二

「癒し」という言葉は、人が人によって癒されるというだけでなく、音楽や絵画、植物、飲み物など、人間以外のモノによって癒されるということも意味するようになってきた。そこには、心の傷は個人でケアすべきものであり、それを外から「理解してやろう」と干渉するのはお節介、とする考えがあるようだ。Bさんを人里離れた老人病院に転院させれば、彼女も落ちつくだろうという発想はこういうところに端を発しているのだろう。

確かに、災害や犯罪、突然の事故にあって強い恐怖を体験した人々の、事件の記憶そのものからくる悲しみは、なかなか他者には理解できない個人的な事柄かもしれない。

例2について

問一では、病気で健康を失ったBさんの事例と関連させて、自分が交通事故にあったときの体験を取り上げ、その際に経験した周囲の反応などを、問二での考察につなげた。

最近では、家族でも友人でも、より淡泊なつきあい方が好まれるようになってきているようだ。恋人同士でも、つかず離れずでそれぞれに黙って何かをしているという関係が最もなごむという意見に共感を覚える人は多いと思う。例えば「癒し」という言葉の背景には、このように関わりの多い人間関係を煩わしいものとして、否定的なイメージで語る風潮がある。問二は、この現代的「癒し」観を、「他者の「悲哀」」を皆で共有しようという考え方と対極にあるものと位置づけ、他者の心に干渉しない「やさしさ」の負の側面について考察を深めた。

小論文は、常に「…ねばならぬ」「…するべきだ」という主張を最後に打ち出さなければならないという

ZTAJA1-Z1C1-11

しかし、悲しみそれ自体は理解できないにしても、その悲しみを社会のなかに位置づけ、その人の置かれている状況を「理解しよう」とすることは必要だ。「思い出さないほうがよい」「寝た子を起こすな」という対処法は、一見「やさしさ」であるように映るが、被害者が現在抱えている社会生活上の困難と、そこからくる新たな悲しみを、同時に「ないことにしてしまう」という危険を持っているからだ。

こう考えると、現代人が各自勝手に自分の「癒し」に没頭している状況は、所詮対症療法にすぎず、悲しみの根本的解決につながらないばかりか、悲しむ人々が互いに「他者」のまま、孤独に打ち捨てられるという現象を、かえって助長するものになっているように思われる。

(二行二五字詰換算 六〇〇字)

ものではない。考察の素材として選んだ事象に対する自分なりの解釈・分析をきちんと示すことができれば、そこにおのずと独自の問題意識が表れ、論として十分成立するという点をぜひ参考してほしい。